【作付意向調査（令和８年６月末時点）を踏まえた見通し】

令和８年６月末時点の作付意向では、主食用米の作付意向は136.0万haであり、1.70㎜ふるい目幅の直近５年中最大と最小を除く３年の平均の単収（538kg／10a）を用いて計算すると、主食用米の生産量は732万玄米トンに相当します。令和８年産生産量は玄米ベースでは､732万玄米トン、精米ベースでは、648万精米トンから654万精米トンの見通しとなり、これを踏まえた見通しについて、表５右に示しています。

表５　令和８／９年の主食用米等の需給見通し

			玄米ベース（万トン(玄米)）	精米ベース（万トン(精米)）	作付意向調査（令和８年６月末時点）を踏まえた見通し 玄米ベース（万トン(玄米)）	作付意向調査（令和８年６月末時点）を踏まえた見通し 精米ベース（万トン(精米)）
令和８／９年	令和８年６月末民間在庫量	A	243	216	243	216
	令和８年産主食用米等生産量	B	711	630～635	732	648～654
	令和８／９年主食用米等供給量計	C＝A＋B	954	846～851	974	864～870
	令和８／９年主食用米等需要量	D	693～711	620～630	693～711	620～630
	令和９年６月末民間在庫量	E＝C－D	242～260	215～231	263～281	234～250

注：ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。

なお、事前契約による令和８年産備蓄米の政府買入契約数量は21万玄米トンとなりました。これは、上記の令和８年産主食用米等生産量には含まれていません。

政府備蓄米の売渡し（全体で59万トン）に係る買戻し及び買入れは、供給不足が生じる見込みが低い環境下で行うことが必要であることから、令和８年産米の作柄を含め、今後の需給状況等を見定めた上で、時期・数量を判断します。その上で、後述の第３の１⑴②の備蓄期間が経過している備蓄米（令和２年産米）の販売に向けて準備します。

上記の見通しは、国内で生産された主食用米等の需給見通しであり、第４の２のＳＢＳ方式や枠外の民間輸入（令和７年度：約11万実トン）による輸入米は含まれません。

上記の需給の見通しについては、今後の生産量や需要量の変動の把握に努め、必要に応じて柔軟に見直していきます。

第３　米穀の備蓄の目標数量その他米穀の備蓄の運営に関する事項

１　備蓄運営の基本的な考え方

⑴　政府が行う備蓄については、米穀の供給が不足する事態に備え、必要な数量の米穀を在庫として保有することとされていることから、毎年６月末時点での在庫量100万トン程度を現行の適正水準として、需給状況を踏まえつつ必要な数量の米穀を保有することとします。

備蓄運営手法については、平成23年度から棚上備蓄方式に移行しました。

棚上備蓄方式による備蓄運営の基本的な考え方は、

①　適正備蓄水準は100万トン程度（６月末）

②　国内産米を一定期間（５年間程度）備蓄

③　備蓄米の買入れは､出来秋の市場価格に影響を与えないよう事前契約によることを基本に、公正性・透明性を確保する観点から、一般競争入札により実施

また､｢総合的なＴＰＰ等関連政策大綱｣（平成29年11月24日ＴＰＰ等総合対策本部決定）に基づき、環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（平成30年12月30日発効。以下「ＣＰＴＰＰ協定」という。）に基づく豪州に対する国別枠の輸入量に相当する量の買入れを行う（なお、当該買入れは、その前年の１月から12月までに豪州から実際に輸入した数量に相当する量の当年産米に係る事前契約により行うものとする。上記に即して備蓄運営が行われた場合の基本的な買入数量は、20万トンから21万トンまでの範囲となる。）。

④　備蓄米は、備蓄後に飼料用等の非主食用として販売

なお、加工原材料用販売（従来から販売している備蓄米のうち精米形態で保管する米穀の販売を除く。）については、前年産の加工原材料用の国内産米の供給量が大きく減少し、米加工品製造業者による当年産への切替えの前倒し及び第４のミニマム・アクセス米への代替が行われてもなお端境期の供給が不足すると認められる場合において、当年８月以降に行うものとする。

⑤　大凶作や連続する不作などにより、民間在庫が著しく低下するなどの米が不足する時における備蓄米の放出については、食料・農業・農村政策審議会食糧部会において、放出の必要性に関し、作柄、在庫量、市場の状況、消費動向、価格及び物価動向等について総合的な観点から議論を行い、これを踏まえて、農林水産大臣が備蓄米の放出等を決定

としています。

⑵　他方、毎年11月30日までに行う基本指針の見直し後、不作以外の災害等による緊急事態により、主食用米等の需給見通しに沿った「主食用米等供給量」の確保に支障が生じる場合であって、農林水産大臣が必要と認めるときは、その供給量の減少分を備蓄米により代替供給できることとします。

⑶　⑴の⑤の放出及び⑵の代替供給のほか､主食用米の円滑な流通に支障が生じる場合であって、農林水産大臣が必要と認めるときは、備蓄の円滑な運営を阻害しない範囲で、買受資格者に対する主食用としての備蓄米の売渡しを、政府が当該買受資格者から一定期間後(原則５年以内)に当該備蓄米と同等同量の国内産米の買入れを行うとの条件を付した上で、できることとします（買戻し条件付売渡し）。ただし、買受資格者が小売業者その他農産局長が定める者である場合においては、当該条件を付すことを要しないこととします。

⑷　なお、備蓄運営手法については、棚上備蓄方式による備蓄運営や、経営所得安定対策の実施状況など、今後の米穀の需給をめぐる状況を踏まえつつ、毎年検証を行い、適正かつ効率的な備蓄運営に向けて、今後とも必要な見直しを行うものとします。

２　令和８／９年の備蓄運営

令和８年産米の備蓄米としての買入契約数量は、21万トンとなりました。

政府備蓄米の売渡し（全体で59万トン）に係る買戻し及び買入れは、供給不足が生じる見込みが低い環境下で行うことが必要であることから、令和８年産米の作柄を含め、今後の需給状況等を見定めた上で、時期・数量を判断します。その上で、第３の１⑴②の備蓄期間が経過している備蓄米（令和２年産米）の販売に向けて準備します。

こうした状況を踏まえつつ、着実な備蓄水準の回復に向け、今後の備蓄運営を適正かつ効率的に行います。

第４　米穀の輸入数量及びその種類別の数量に関する事項

我が国は、平成７年度からガット・ウルグァイ・ラウンド農業合意に基づくミニマム・アクセス米の輸入を実施しており、この輸入は､｢ガット・ウルグァイ・ラウンド農業合意の実施に伴う農業施策に関する基本方針｣（平成５年12月17日閣議了解）の趣旨を踏まえつつ行うこととしています。また、これに加えて、平成30年度からＣＰＴＰＰ協定に基づく輸入を実施しています。いずれの輸入に当たっても、輸出国の輸出余力、国際相場等を勘案しながら適切に行うこととしています。

１　令和７会計年度の輸入状況

令和７会計年度においては、令和７年３月の基本指針に基づき、ガット・ウルグァイ・ラウンド農業合意に基づく77万玄米トン（うちＳＢＳ（売買同時契約）方式による輸入10万トン）及びＣＰＴＰＰ協定に基づく7,200トン（ＳＢＳ方式により運用する豪州に対する国別枠）の輸入を実施すべく、順次買付けを行いました。その結果、ガット・ウルグァイ・ラウンド農業合意に基づく輸入について全量（うちＳＢＳ方式による輸入10万トン）を買い付けるとともに、ＣＰＴＰＰ協定に基づく輸入についても全量を買い付けました。

２　令和８会計年度の輸入方針

令和８会計年度の輸入予定数量は、ガット・ウルグァイ・ラウンド農業合意に基づく輸入については、ＷＴＯ農業交渉において新たな合意ができるまではミニマム・アクセス数量は平成12年度の水準が維持されることから、年間77万玄米トンとし、そのうちＳＢＳ方式による輸入については、予定数量を年間10万トンとします。また、ＣＰＴＰＰ協定に基づく輸入については、ＳＢＳ方式により運用する豪州に対する国別枠として、予定数量を年間7,440トンとします。